

ひらめきをのがさない！
梅棹忠夫、世界のあるきかた

sample

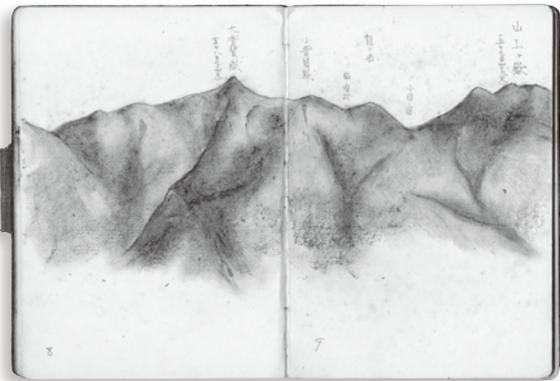
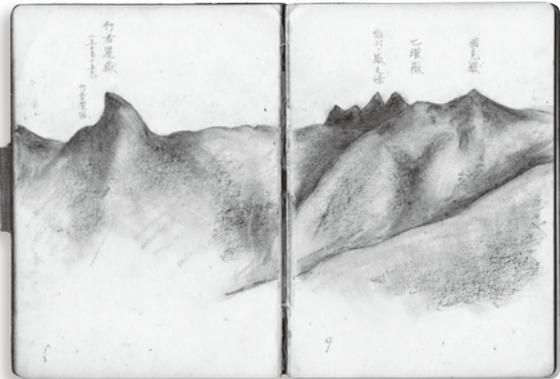
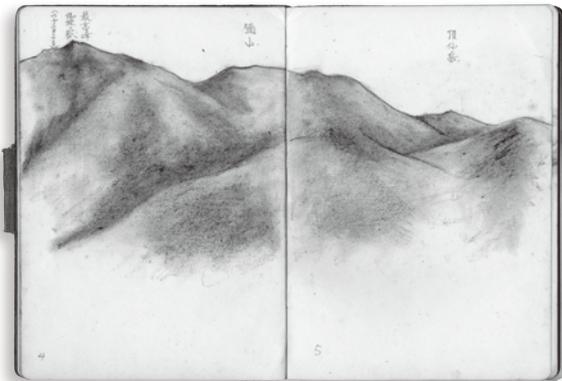
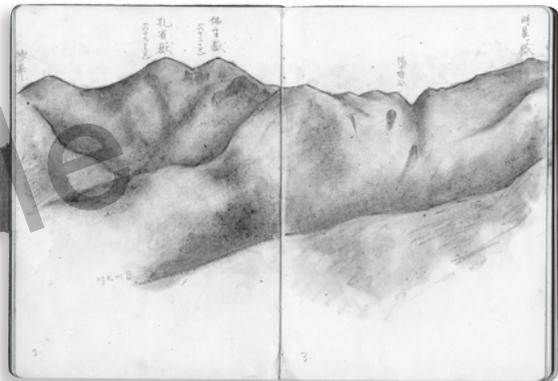
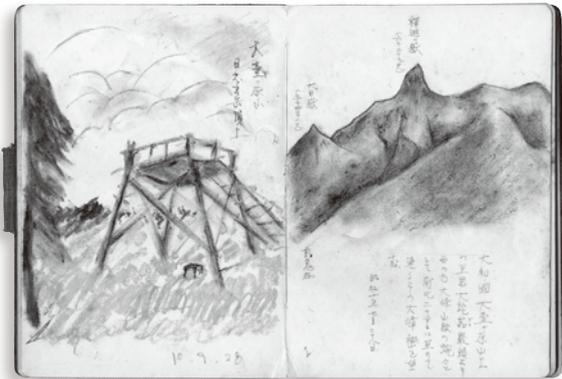
第一章
●
スケッチの時代

sample

台高山脈から大峰山系へ——少年たちの遠征

翌朝はやく、日出ヶ岳山頂まで日の出をおがみにいった。伊勢湾の雲海のかなたから、太陽がのぼるのがうつくしかった。大台ヶ原から西にいったん谷ぞいの街道にでて、前鬼口^{ぜんきぐち}までバスでいってそこでとまった。ここから、いよいよ大峰山脈にとりつくのである。

(16—126)



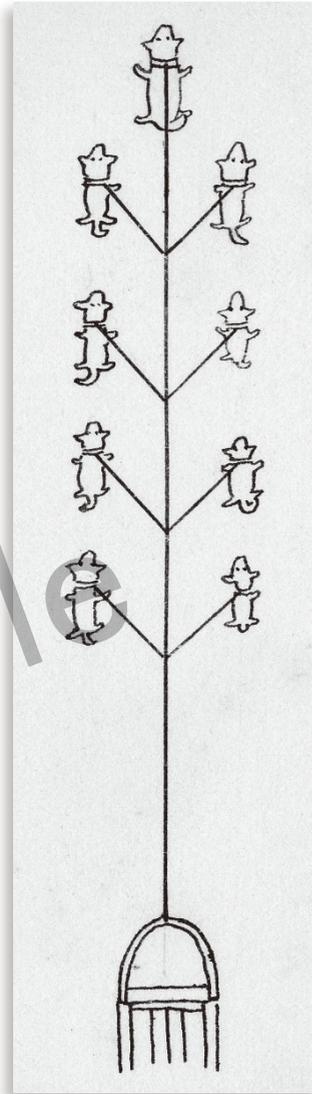
一九三五年、中学四年生の夏やすみに、山岳部員らと紀伊の山やまを歩いたときの記録である。「少年たちの遠征」として、一九九二年に回想されている。この復元力は尋常ではない。アルバムなどの記録に依存しているのだろうか。もちろん、遠征当時にアルバムをつくるにしても、記憶力を駆使しなければならぬことは言うまでもない。

そもそも、サーベイ型のフィールド・ワークでは、つねに移動してゆけること自体が難しい。脳みそに書きつけることが重要となる。

梅棹は、中学一年のときから、山登りに熱中した。わずか二カ月で二冊のノートがなくなってしまうほどに、充実した記録をつけた。道中はメモに書きつけ、帰宅してから整理して帳面に書いたのだろうか。ともあれ、そうした克明な記録をつける習慣が、世界を歩くときの基礎的な素養となっただろうことは、うたがうべくもない。

イヌゾリの性能調査

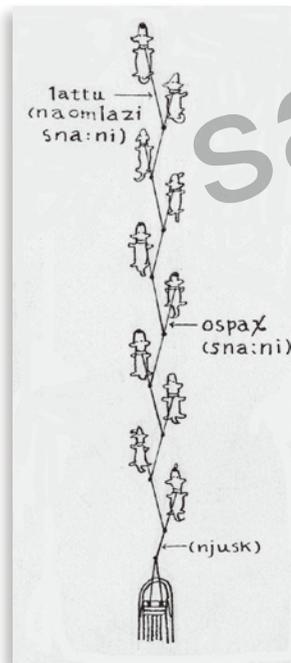
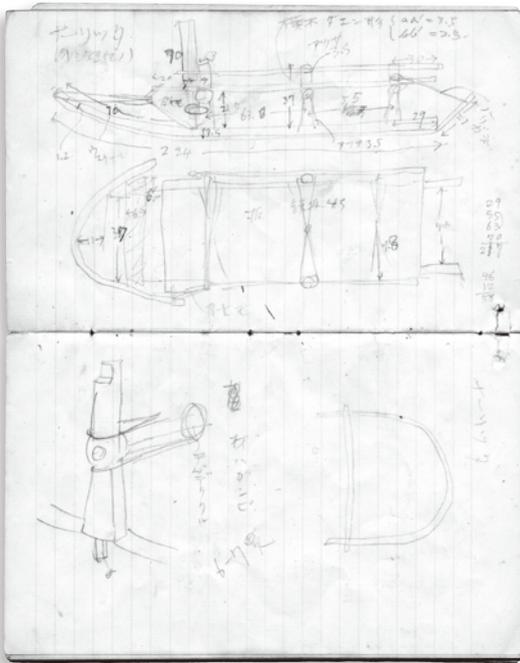
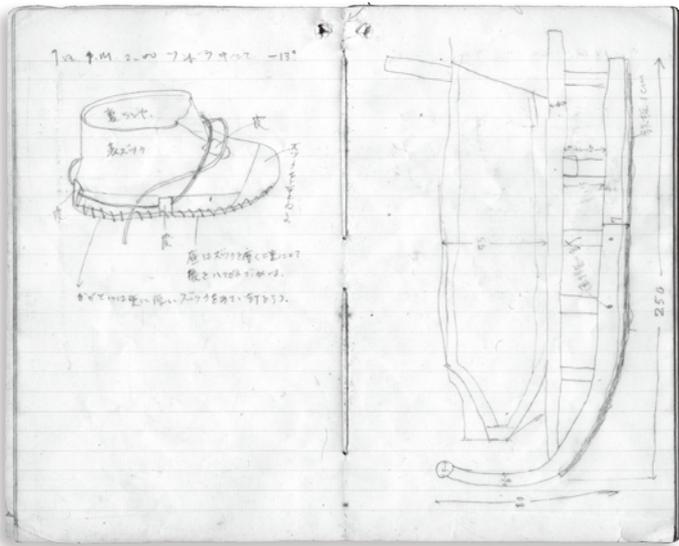
このシステムのなかにも、こまかい差異によっていくつかの形式が区別できる。第一は第11図にしめしたもので、過去の極地探検隊によっておそろくもつともおおく採用されている。第二は、第12図のごとく、イヌは主綱をはさんで対をなさずに交互に配列される。…そしてカラフトのように雪のふかい場所では、じつさいにもちいられているのはこの方法だけであり、かつその特徴を遺憾なく発揮している。(1-82)



(第11図)

一九四〇年、京都探検地理学会の樺太踏査隊に、梅棹は高校生ながら参加を許された。この踏査隊のおもな目的は、南極探検を念頭においた、イヌゾリの性能調査であった。そして、それについて実際に論文を書いたのは梅棹であった。論文に付されたイヌの配置図ものこされている。スケッチというよりも、製図にちかい。ことばによる解説は、こうした図示を分解したものであることがわかる。図でしめす力は、情報の収集はかりでなく、情報の発信に際しても、浸透力をもつ。

この論文が日本の南極探検に利用され、夢が展開するさまは『裏がえしの自伝』(二〇一一年、中公文庫)に詳しい。



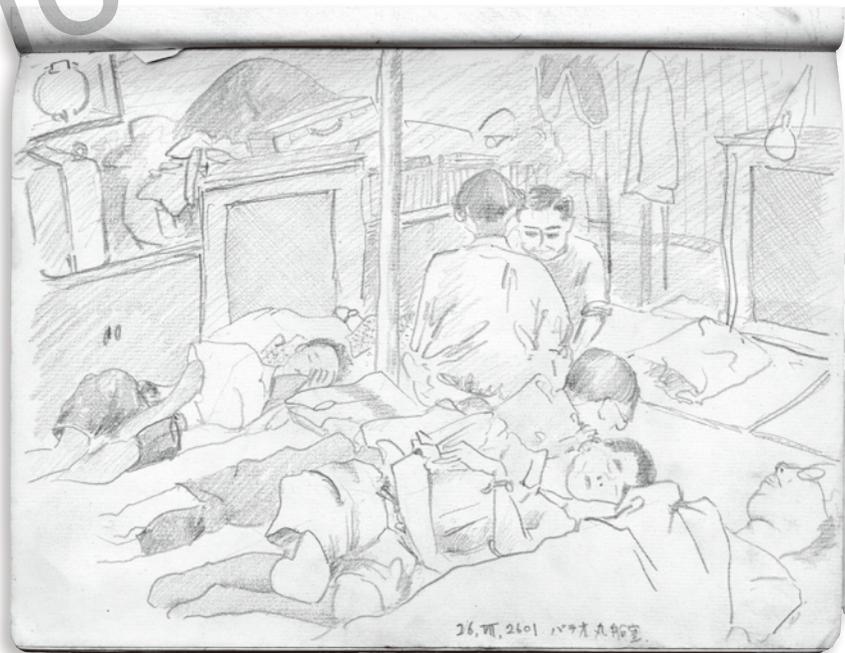
(第12図)



ポナペ行ききの船。パラオ丸

しかしながらわれわれ学生隊員たちは三等船客である。スクリーンの真うえの隔離された一角を占領してみたものの、船内は南洋ゆきの、それも大半は南洋へかえる人たちがらしく見うけられた人びとの、言語を絶した超満員には、どうやらかぶとをぬがざるをえなかった。

(1-107)

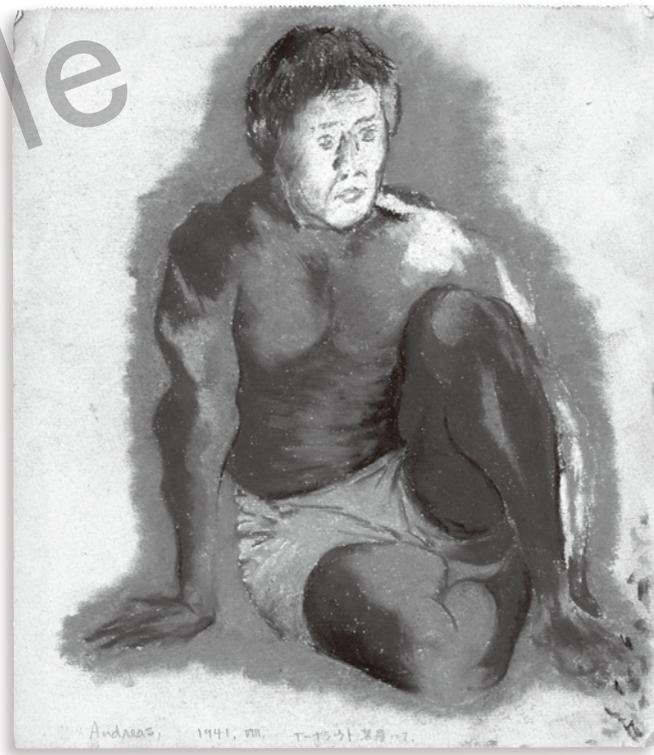


超満員であるうえに、南下するにしたがって暑さをまし、耐えかねて、デッキですこすようになる。船内で眠るようすと、デッキでくつろぐようすを描いたスケッチがのこされている。カメラがまだめずらしく、フィルムが貴重だった時代、スケッチは重要な映像記録手段であった。「わたしは、子どものころから、いわゆる「絵ごころ」があったほうで、絵をかくことにためらいはなかった」(11-555)とある。映像技術が進んで、コンピューター処理が著しい現在では、ますます身体的な技法が失われている。絵ごころがなくても、かまわないのだろうか。

ポナペの友人 アンドレアス

先頭をすすんでいたアンドレアスは、ニイナニ峰の肩からキチー川の谷にむかって下降をはじめた。それは急斜面のすべりやすい斜面であった。尾根道は、偵察隊が二回も往復したあとであるから、比較的よくふまれていたが、この下降路は、ほとんどあるかなきかのもので、アンドレアス以外のものでは識別がむづかかったであろう。みるみるうちに森林はふたたびその樹高をました。

(1179~180)

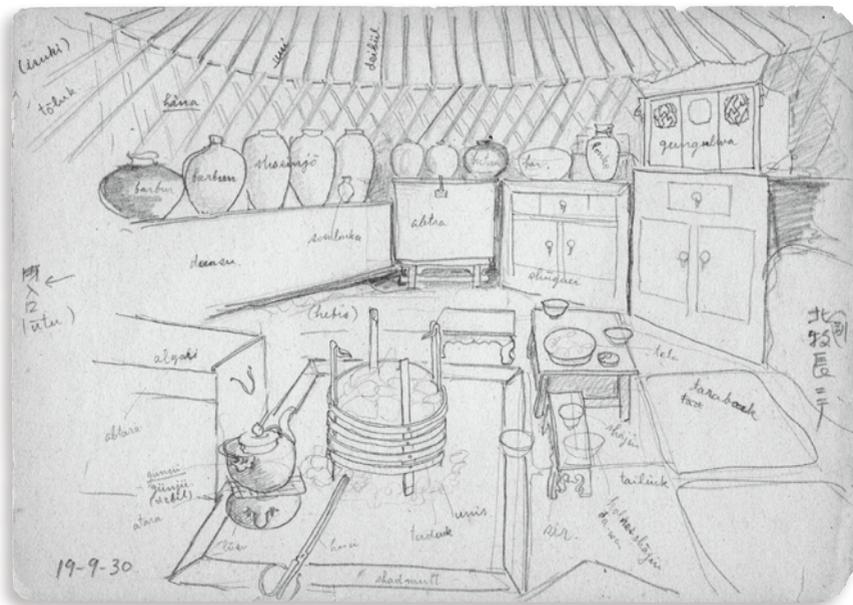


一九四一年、京都探検地理学会の学生会員たちが、今西錦司を隊長に押し立てて、南洋調査に出かけた。ポナペ（現在のポンペイ）島では約一カ月滞在したが、その記録「南洋紀行」をみればわかるように、どちらかと言えばサーペイ型のフィールド・ワークである。

たくさんの友人と出会うが、なかでも島の猟師アンドレアスは、はなばなしい活躍をして人氣者になった、探検隊の功労者である。

フィールド・ワークの成功の秘けつは、ラポールにある。ラポールとは、人と人のあいだでなら、信頼関係のことであり、人と人以外たとえば現地社会とのあいだでいえば、心理的な調和のことである。とくに、自分がどんなに好きであっても、一方的な関係なら、それはラポールがあるとは言えない。

自分と現地とをつないでくれる信頼できる人との出会いが旅を豊かにする。探検の場合には、それが生死を決することにもなる。



モンゴル図譜

わたしはさまざまな器物を片っぱしから写生した。このようなスケッチが、現在もなおたくさんのもっている。それはわたしの民族誌写真の先行形態であったのだ。

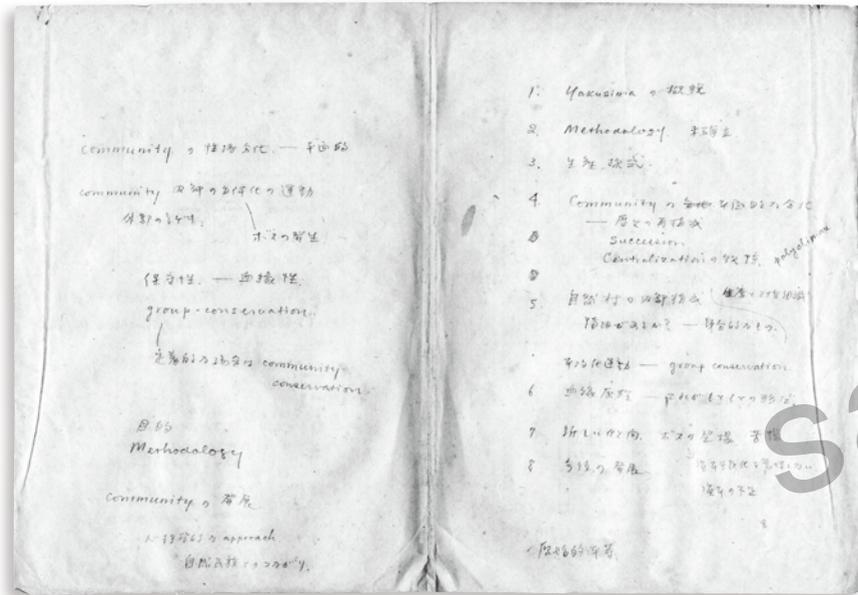
(11-555)

写真撮影とくらべたスケッチによる利点として、その場でチェックできること、細部の構造図の拡大もできること、情報を書き込めることなどを梅棹は列挙している。ところが、これらの点はすべて、今日、写真撮影においても可能となった。できなかったことができるようになった私たちなら、さらにもっと何ができるかを追い求めたい。使いこなすことよってのみ、できないことが発見される。新しい工夫が渴望される。

屋久島にて

ながい、隔離によってコミュニティが「自然」に、自己發展的に形成されてきた場合には、そのコミュニティはこういう平面的なものになるのだ、というかんがえである。すると、それを裏がえせば、ヒエラルキーの起源を、オートジェニクな発展の結果とみずに、よりひろい世界でもまれること——武力的にせよ文化的にせよ、たとえば侵略、征服、奴隷化というようなプロセスをへること——にもとめるといふことにもなる。

(19294)



論文に書かれているこのような結論が、スケッチにのこっているわけではない。そもそもスケッチがただちに論文になるわけではない。論文にしたターゲットだけでなく、ターゲットを掌握するためのより広い文脈として、スケッチがある。

こうしたありかたを、現状と比べると、現在のフィールド・ワークはかなりやせ細っているように思われる。一つのターゲットを明確に設定し、効率的に実施しなければ、つぎの資金獲得につながらないからである。探検というスタイルに内在していた、サーベイ型の、外延を確保する手だてが、別途必要になっている。

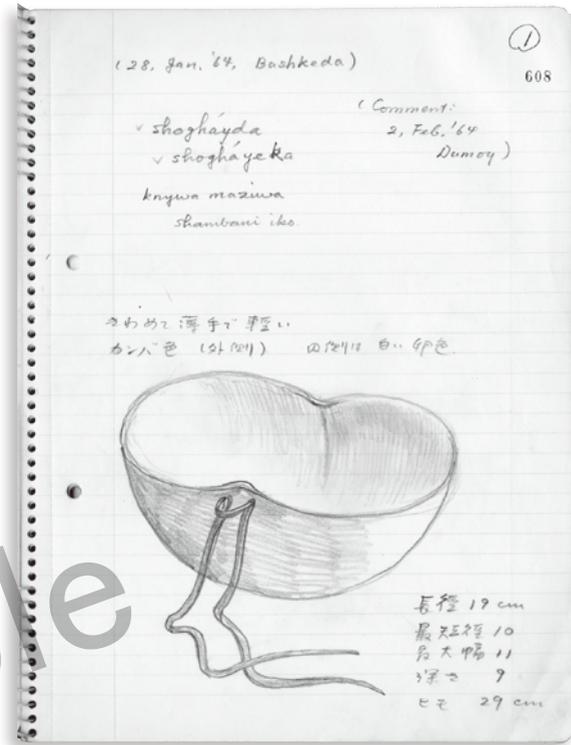
梅棹のこの論文は、柳田國男の眼にとまり、家に遊びにくるように、というハガキが来た。外部からの力によって社会が階層化するといった考え方は、「文明の生態史観序説」と呼んでいる。

思想は一夜にしてならず。

ダトールガ語彙集

ヒヨウタンはさまざまなる形、さまざまなおおきさのものが、さまざまなる用途にもちいられている。

(8—503)



梅棹は、一九六三年から六四年にかけて、京都大学アフリカ学術調査隊に参加し、もっぱらエヤシ基地に滞在して、ダトールガ族の牧畜生活を調査した。その際にもたぐさんのスケッチをえがいた。それらは、モンゴルのスケッチと同様に、図譜としてまとめることができるほどであったが、ダトールガ族の場合は、その語彙に関する情報がたいへん貴重であるため、語彙集としてまとめられている。

梅棹は、音韻体系とその表記についてまんだことを生かして、未知の言語についての詳細な記録をのこしていた。そして、多忙な時期をすりぬけて、失明後にようやくまとめられた。調査から四〇年もたったあとのことである。

詳細な記録というものは、それ自体、時を超える力をもっている。

